語頭濁音語を派生させる接頭語について
――「ド -」「ブ -」「ブチ -」を中心に――

鈴　木　　豊*

［キーワード］　語頭濁音語　語頭濁音接頭語　二重語　強調的意味　指悪的意味

［要旨］「語頭濁音語」（語頭が濁音の和語）は奈良時代までの日本語に存在した「語頭に濁音が位置することができない」という和語に関する頭音法則を破ることによって生まれ、その後次第にその数を増加させ今日に至っている。語頭濁音語は現代語においてもなお、(1) 少数派である、(2) 清音形と一種の二重語をなす、(3) 意味領域に偏りがある（a) 清音形に対する強調形であったり、b) 指悪的意味を加えたりしている）というような特徴がある。これらが「語頭濁音接頭語」（和語に接続して語頭濁音語を派生させる接頭語）にも同様に見られる特徴であるのかを、『日本国語大辞典　第二版』において「接頭語」の表示がある語の全てを資料として検証した。その結果、語頭濁音語が接頭語化した「ガラ -」「グイ -」「ズイ -」「ズブ -」「ダダ -」「デモ -」「ドカ -」「ドス -」「ブチ -」および漢語起源と推定される「ズ -」「ド -」では、接頭語の着かない語との関係を一種の二重語形であると見なせば、上記 (1) ～ (3) の特徴は語頭濁音語と共通しているといえる。一方、漢語出自の接頭語が和語にも接続するようになったもののうち、「ブ -」については事情が異なっている。「ブ -」は否定の接頭語「フ -（不)」「ム -（無)」を冠した語の一部が「ブ」と読まれるようになり、まず形の上で語頭濁音接頭語となった。そして次の段階として、語頭濁音であることにより他の語頭濁音語との間で類推作用が働き、強調や指悪的意味を表すようになったと考えられる。漢語出自と推定されている「ド -」もすでに近世以前から和語に接続して強調的意味を担っている。和語の語頭濁音語は平安時代以降その数を増やしているが、語頭濁音接頭語の場合も同様であり、現代語でもなお総体として見れば造語力は旺盛である。漢語出自の「ド -」「ブ -」は現代語においてはその性格の中心を漢語接頭語から語頭濁音接頭語に移しており、特に「ド -」は語種・品詞を撰ばず多様な語に接続して新たな語頭濁音語を盛んに創出するに至っている。このことから、語頭濁音語がもつ類型的意味は歴史的に強化される方向で推移してきており、その結果和語という語種の制約を超えて類推作用を及ぼすに至ったと解釈することができよう。

＊教授／日本語学

1. はじめに

「語頭濁音語」（濁音で始まる和語）は奈良時代までの日本語に存在した「語頭に濁音が位置することができない」という和語に関する頭音法則を破ることによって生まれ、その後次第にその数を増加させ今日に至っている。現代語においてもなお、(1) 少数派である、(2) 清音形と一種の二重語をなす、(3) 意味領域に偏りがある（ a) 清音形に対する強調形であったり、b) 指悪的意味を加えたりしている）というような特徴がある。小論の目的はこれらの諸特徴が「語頭濁音接頭語」（和語に接続して語頭濁音語を派生させる接頭語）にも共通するものであるのかどうかを検証することにある。すでに語頭濁音語全般についての研究史の整理と、成立過程による分類を前稿（鈴木豊（2010））において行っているので、本稿ではまず語頭濁音語の成立過程や意味特徴に語頭濁音接頭語のそれが合致するか否かを調査し、合致しない部分があればさらに考察を進めるという形で研究を進めることとする。語頭濁音語接頭語として、『日本国語大辞典　第二版』（以下『日国　第二版』と記す）において「接頭語」の表示がある 12 種の接頭語（「ガラ -」「グイ -」「ズ -」「ズイ -」「ズブ -」「ダダ -」「デモ -」「ド -」「ドカ -」「ドス -」「ブ -」「ブチ -」）を冠する派生語の全てを選び出し（306 語）、それらを成立順に整理して考察のための中心資料とした。

2. 研究史

鈴木豊（2010）では語頭濁音語についての先行研究を整理したうえで語頭濁音語を次のように分類した（細分類と語例を省略して示す）。

①音韻変化による濁音化
　語頭母音の脱落
②語形の改変による濁音化
　a. 連濁形の取り出し　　b. 上略　　c. 倒語　　d. 類推
③意味の分化を伴う濁音化
　a. 清音の濁音化に伴う語頭の濁音化　　b. 濁音接頭語添加
　c. 清音以外の濁音化　　d. オノマトペ
④その他（未詳）

このうちの③ a は「タマ（玉）」と「ダマ（玉）」、「ホケル（惚）」と「ボケル（惚）」のように語頭清音形と語頭濁音形とが基本的語義を同じくしながら濁音形が強調的あるいは指悪的意味を担っている場合、③ b は「サマ（様）」と「ブザマ（不様）」、「シロウト（素人）」と「ドシロウト」のような語頭濁音接頭語を冠した語を、③ c は「ノラ猫」と「ドラ猫」のような

ナ行とダ行の対応（この場合も後者が指悪的である）の見られる場合、d はオノマトペに見られる「サラサラ」と「ザラザラ」のような対応がある場合で、後者が強調的意味を担っていると考えられる。鈴木孝夫（1962）は③ a のような両語の対応関係について、左項が基本形態で右項が派生形態であり、「左右両項の持つ指示的意味（denotative　meaning）が同一の意義範疇に属しており、但し右項はその指示対象（denotation）に対する話者の、ある特定の情緒的態度（emotive　attitude）或いは評価（emotive　evaluation）が含蓄的意味（connotative meaning）として附加されているものと見做すことが出来」ることを指摘している。④は動植物名に見られる語頭濁音語（たとえば魚名の「ボラ」や植物名の「ブナ」など）で、対応する清音形が存在していものである。

①と②は新語形が旧語形に置き換わる変化（たとえば①の例として「イダク（抱）＞ダク」）であって共時的に両形が存在する③の場合と異なる。基本的に新語形が旧語形の意味を引き継ぐので、意味の分化に関わらない語頭濁音化であるが、亀井孝（1970）は「わたくしたちは「いだく」と「だく」とのあいだをひそやかな連想のいとでやはりむすびつけている。そのうえではまた、他方、ふたつのすがたは雅俗の別をもってわかたれる。この分離と対立とが意識にのぼるかぎり「だく」はやはり俗である、たとえ雅俗のひらきそのものはかかるばあいつねに多分に相対的であり、さらにもともとそれ自体においては主観の真実としておぼめかしさこそその本質であるにせよ――」と述べる。また、「語はそれぞれに個別の運命をもっている。「ばら」「ざる」の例については古形の伝承はたえている。しかし、さかのぼれば、これらも「いだく」や「いずこ」とおなじく「いばら」「いざる」のかたちであったことが文献によって考証される。また「ばら（薔薇）」は「いばら（茨）」と歴史的にいえば二重形である」とも述べている。現代語としての「バラ」には語頭濁音語がもつ類型的意味はないが、外来語辞典の記述に「紅毛人都て刺棘（ばら）のあるものをローズと云」（1763 年刊『物類品隲』一）があり、当時「バラ」は現代語の「イバラ」が有している「トゲ」の意味で使用されていたことが知られる。以上から、鈴木孝夫（1962）の指摘した「濁音形は清音形のもつ指示的意味に対して含蓄的意味を付加する」ということは、歴史的な観点を持ち込めば、例外が限られてくることになる。

語頭濁音接頭語に関する個別的研究として、「ド -」に関する道行朋臣（1997）、「ダダ -」に関する島田泰子（2008）、「ブ -（不・無）」に関する丹保健一・倪永明（2000）があり、また、近世の接頭語に関する総合的研究に前田勇（1968）がある。これらについては第 4 章で触れることにする。

3. 語頭濁音語を派生させる接頭語

〈表 1〉は『日国　第二版』において「接頭語」の表示がある 12 種の接頭語（「ガラ -」「グイ -」「ズ -」「ズイ -」「ズブ -」「ダダ -」「デモ -」「ド -」「ドカ -」「ドス -」「ブ -」「ブチ -」）に

ついて、立項されている派生語のすべてを抜き出し、成立年順に配列したものである。成立年は初出例出典の成立年に拠った。よって立項されていても用例のないもの（方言形として立項されている「ど - しょっぽね（土性骨）」・「どつぼ（―壺）」・「どんじまい（―仕舞）」・「どんづめ（―詰）」）は表に含ていない。「ド -」「ブ -」「ブチ -」は語数が多いことと詳細に調査すべき特徴をもっていると予測されたため独立させ、用例の多くないそれ以外の語を「その他」として全体を四つに区分した。表の各項目は成立年・見出し・［漢字表記］・出典の順に配列されている。見出し項目がゴシック体で表示されているものはその語が漢語であることを示す。

〈表 1〉に収載されている語は『日国　第二版』では以下のように記述されている。

ド -（ドウ -・ドン -）（接頭語「どう」の変化した語か）1名詞・形容詞・形容動詞、時には動詞の上にも付いて、ののしる気持をこめる。近世以来の上方の俗語で、現在も関西方面を主として用いられている。「ど根性」「どしぶとい」「どあつかましい」など。2名詞や形容詞の上に付いて、まさにそれに相当する意であることを強調する俗語。「ど真ん中」「どぎつい」など。

ブ -【不】体言につけて、それを打ち消し否定したり、その内容がよくない意を表わしたりする語。無（ぶ）。「不細工」「不調法」「不恰好」「不器量」「不器用」など。
【無】1体言に付けて、それがない意を表わす語。「無遠慮」「無作法」「無しつけ」など。
2「ぶ（不）」に同じ。「無細工」「無器量」「無器用」など。

ブチ -（ブッ-・ブン -）（動詞「ぶつ（打）」の連用形から）動詞の上に付けて、その意味を強める。また、荒々しい動作でそのことをする意を表わす。「ぶっ」「ぶん」という音便形にもなる。「ぶち明ける」「ぶち売る」「ぶち返る」など。

ガラ -　1〔副〕（多く「と」を伴って用いる）物のくずれ落ちる音、また、雑然としたさまを表わす。2〔接頭〕（人を表わす名詞や、個人名の上に付く）がさつな、または、おしゃべりであけっぴろげな、などの意味を添える。「がらっ」の形をもとる。「がらむすめ」「がらっぱち」など。

グイ -　一〔副〕（多く「と」を伴って用いる）1力を入れて急に押したり引いたりするさまを表わす語。また、物事を勢いよく行なうさまを表わす語。2酒などをひと息に飲むさまを表わす語。二〔接頭〕多く動詞の連用形の上に付いて、動詞の表わす行為に、すぐに、さっそく、そのまま、一息に、勢いよくなどの意味を添える。「ぐいながし」「ぐいね」「ぐいのみ」など。

〈表 1〉　語頭濁音語を派生させる接頭語対照表（成立年順）

ド -	ブ -
成立年　みだし　［漢字表記］　出典	成立年　みだし　［漢字表記］　出典
（該当語なし）	1103　**ぶさた**［無沙汰･不沙汰］殿暦 1162-64頃　**ぶげい**［不芸］本朝無題詩 1179頃　**ぶどう**［不道･無道］梁塵秘抄
（該当語なし）	13C 前　**ぶれい**［無礼･不礼］高野本平家 13C 前　**ぶあんない**［無案内･不案内］平家 13C 前　**ぶきりょう**［不器量･無器量］平家 1219　**ぶき**［不器･無器］毎月抄 1220頃か　**ぶちょうれん**［不調練･無調練］保元 1231-53　**ぶえんりょ**［無遠慮･不遠慮］正法眼蔵 1283　**ぶちょうほう**［不調法･無調法］高野山文書
（該当語なし）	1324　**ぶれいこう**［無礼講･不礼講］花園天皇宸記 14C 後　**ぶへんじ**［不返事･無返事］太平記 14C 後　**ぶどうじん**［無道人･不道人］太平記
（該当語なし）	15C 前　ぶしつけ［不躾･無躾･不仕付］今川大双紙 1407-46頃か　**ぶねん**［不念･無念］三国伝記 1420　**ぶしあん**［無思案･不思案］応永本論語抄 1423-28頃　**ぶようじん**［不用心･無用心］遊楽習道風見 1455頃　**ぶきよう**［不器用･無器用］東野州聞書 室町中　**ぶほうこう**［不奉公･無奉公］文明本節用集 1477　**ぶびょうし**［不拍子･無拍子］鹿足之次第
1529頃　どうづよし［―強］寛永刊本蒙求抄 1554　**どうよく**［胴欲･胴慾］毛利家文書 1563　**どしょう**ね［土性根］玉塵抄 室町末 - 近世初　どづく［―突］虎明本狂言･鍋八撥 室町末 - 近世初　どぼね［―骨］虎明本狂言･文山立	1520頃　**ぶきよう**もの［不器用者･無器用者］中華若木詩抄 1520頃　**ぶたっしゃ**［不達者］中華若木詩抄 1520頃　**ぶかっこう**［不恰好･不格好］中華若木詩抄 1525-34　**ぶふうりゅう**［不風流･無風流］細流抄 1534　**ぶしょう**［不精･無精･無性］清原宣賢式目抄 1549　**ぶかんきん**［不換金］言継卿記 16C 後か　ぶあい［不合･不相］武田勝頼滅亡記 1556　ぶふるまい［不振舞］結城氏新法度 1563　ぶあしらい［不―］玉塵抄 1563　ぶあいしらい［不―］玉塵抄 1563　**ぶしゅうげん**［不祝言］玉塵抄 1593　**ぶけんぽう**［無憲法･不憲法］天草版金句集 1595　**ぶこう**［無功･不功］羅葡日辞書 1595　ぶこころがけ［無心懸･不心掛･不心懸］羅葡日辞書 1595　**ぶちそう**［無馳走･不馳走］羅葡日辞書 室町末 - 近世初　**ぶあんないしゃ**［不案内者］虎明本狂

ブチ -	その他
成立年　みだし　［漢字表記］　出典	成立年　みだし　［漢字表記］　出典
（参考）712　うち（接頭）［打］古事記 （参考）720　むち［鞭･笞･策］書紀	（該当語なし）
（該当語なし）	（該当語なし）
（該当語なし）	（該当語なし）
（該当語なし）	1477　ずぬける［図抜･頭抜］史記抄 室町末 - 近世初　どか［－］鷺伝右衛門本狂言･右流左止
（該当語なし）	（該当語なし）

ド -	ブ -
成立年　みだし　［漢字表記］　出典	成立年　みだし　［漢字表記］　出典
	言･連歌盗人 室町末 - 近世初　**ぶたっしゃ**もの［不達者者］虎明本狂言･人馬 室町末 - 近世初　ぶたしなみ［無嗜･不嗜］虎明本狂言･止動方角 室町末 - 近世初　**ぶちょうほう**もの［不調法者･無調法者］虎寛本狂言･縄綯 室町末 - 近世初　**ぶほうこう**もの［不奉公者］虎寛本狂言･武悪
1603-04　どうづく［―突］日葡辞書 1660　どすく［－］狂言記･丼礑 1660　でかい［－］随筆･驢鞍橋 1695　どわすれ［度忘］俳諧･昼礫	17C 初　ぶなり［不形］甲陽軍鑑 1603-04　**ぶさいく**［不細工･無細工］日葡辞書 1603-04　**ぶすき**［不好･不数奇･不数寄］日葡辞書 1603-04　**ぶしんじん**［不信心］日葡辞書 1603-04　**ぶしょたい**［不世帯］日葡辞書 1603-04　**ぶしゅうしん**［不執心］日葡辞書 1614　**ぶきこん**［不機根］慶長見聞集 1614　**ぶはんじょう**［不繁昌］慶長見聞集 1632　**ぶしょう**ごま［不精独楽･無精独楽］仮名草子･尤双紙 1642　**ぶすきしゃ**［不好者･不数奇者･不数寄者］仮名草子･可笑記 1642　ぶあいくち［不合口･無相口］仮名草子･可笑記 1647　**ぶしょう**もの［不精者･無精者］仮名草子･悔草 1650　**ぶっきょう**［不器用･無器用］かた言 1656　**ぶしんじゅう**もの［不心中者］評判記･満散利久佐 1659　**ぶあいさつ**［不挨拶］仮名草子･身の鏡 1660　**ぶかんのう**［不堪能］わらんべ草 1660　**ぶさほう**［無作法･不作法］わらんべ草 1666頃　ぶわか**しゅ**［不若衆］評判記･難野郎古たたみ 1671　**ぶしょう**げ［不精気･無精気］狂歌･堀河百首題狂歌集 1672　**ぶていしゅ**［不亭主･無亭主］狂歌･後撰夷曲集 1677　**ぶぜんせい**［不全盛］評判記･けしずみ 1678　**ぶこうしゃ**［無功者･不功者］評判記･色道大鏡 1679　**ぶていしゅ**ぶり［不亭主振･無亭主振］俳諧･飛梅千句 1680　ぶしつけもの［不躾者］続無名抄 1686　**ぶきび**［不気味］拘幽操辨 1687　**ぶしんじゅう**［不心中］浮世草子･男色十寸鏡 1699　**ぶふうが**［不風雅･無風雅］俳諧･続五論
1703　どうずり［―掏摸］浄瑠璃･曾根崎心中 1707　**どんびゃくしょう**［―百姓］浄瑠璃･五十年忌歌念仏 1710頃　**どうこんじょう**［―根性］浄瑠璃･袂の白しぼり 1710頃　**どこんじょう**［―根性］浄瑠璃･孕常盤	1701　**ぶしゅうぎ**［不祝儀］浮世草子･傾城色三味線 1701　**ぶしんてい**［不心底］浮世草子･傾城色三味線 1703　**ぶにんそう**［不人相･無人相］歌謡･松の葉 1706　**ぶとう**［不当］浮世草子･風流曲三味線

ブチ -	その他
成立年　みだし　［漢字表記］　出典	成立年　みだし　［漢字表記］　出典
17C 初　ぶっきる［打切］甲陽軍鑑 1659-61頃　ぶちあかす［打明］仮名草子･東海道名所記 1667　ぶっきれる［打切］俳諧･やつこはいかい 1671　ぶった･てる［打立･打建］仮名草子･ぬれぼとけ 1678　ぶちのる［打乗］浄瑠璃･四天王女大力手捕軍 （参考）1683頃　ぶつ［打］雑兵物語 1683頃　ぶったおれる［打倒］雑兵物語 1683頃　ぶちこむ［打込］雑兵物語 1683頃　ぶっかえる［打返］雑兵物語 1683頃　ぶんまける［打撒］雑兵物語 1683頃　ぶんまげる［打曲］雑兵物語 1683頃　ぶちまける［打―］雑兵物語 1683頃　ぶちだす［打出］雑兵物語 1691　ぶんさぐ［打提］浮世草子･三島暦 1693　ぶちかける［打掛］歌舞伎･好色伝受	1660　ずはぐれる［図逸］俳諧･新続犬筑波集 1688-1710　だだびろい［―広］仁説問答師説 1694　ずぶぬれ［―濡］俳諧･句兄弟
1702　ぶちかえる［打返］雑俳･冠独歩行 1705　ぶちころす［打殺］浄瑠璃･用明天皇職人鑑 1707頃　ぶちあげる［打上］浄瑠璃･丹波与作待夜の小室節 1708　ぶんなげる［打投］浄瑠璃･雪女五枚羽子板	1705　ずおうへい［図横柄･頭横柄］雑俳･花笠 1709　どかもうけ［―儲］浮世草子･子孫大黒柱 1718　**どかぞん**［―損］浄瑠璃･山崎与次兵衛寿の門松 1722　ぐい　［－］浄瑠璃･浦島年代記

ド-	ブ-
成立年　みだし　［漢字表記］　出典	成立年　みだし　［漢字表記］　出典
1713　どぎつい[]雑俳･大黒柱	1706　**ぶきみ**[不気味･無気味]浮世草子･風流曲三味線
1715　**どびゃくしょう**[土百姓]浄瑠璃･大経師昔暦	1710頃　**ぶさよじき**[不作余食]浄瑠璃･孕常盤
1715?　**どしょう**ぼね[土性骨]浄瑠璃･生玉心中	1717　**ぶひょう**[不拍]浮世草子･世間娘容気
1718　どうづけなし[―付無]浄瑠璃･日本振袖始	1718　**ぶしょう**ざけ[不精酒･無精酒]浮世草子･猿源氏色芝居
1718　どぶるい[―古]浄瑠璃･善光寺御堂供養	1720　**ぶどう**もの[不道者]浄瑠璃･双生隅田川
1720　どう　[－]浄瑠璃･心中天の網島	1720　**ぶさん**[不算]浮世草子･浮世親仁形気
1720頃？　どぶさる[―伏･―臥]浄瑠璃･河内国姥火	1725　**ぶす**[不粋]浄瑠璃･出世握虎稚物語
1721　どうやまぶし[―山伏]浄瑠璃･女殺油地獄	1730　**ぶせい**[不精･無精]狂言記･米市
1731　どんばら[―腹]浄瑠璃･鬼一法眼三略巻	1752　ぶたのもしい[不頼]談義本･当世下手談義
1742?　どんすね[―脛･―臑]歌舞伎･鳴神	1753　ぶしゃれ[不洒落]洒落本･跖婦人伝
1745　**どういんが**[―因果]浄瑠璃･夏祭浪花鑑	1754　ぶま[不間]談義本･八景聞取法問
1749　どびつこい　[－]浄瑠璃･双蝶蝶曲輪日記	1778　ぶはむき[不羽向]雑俳･川柳評万句合
1753　**どがんす**[―頑子]談義本･教訓続下手談義	1780　ぶしつけ**せんばん**[不躾千万]滑稽本･風来六部集
1753　どたま[―頭]歌舞伎･幼稚子敵討	1783　ぶてもち[不手持]咄本･話句翁
1764　**どうちくしょう**[―畜生]歌舞伎･高台橋諍勝負附	1786　ぶきだい[不生鯛]譬喩尽
1765　どんぐるみ[―包]雑俳･柳多留	1787　ぶしゃれる[不洒落]洒落本･通言総籬
1766　**どめっそう**[―滅相]浄瑠璃･本朝二十四孝	1798-1802　**ぶすい**[不粋･無粋]暦象新書
1767　どんじり[―尻]雑俳･柳多留	1800　**ぶしょうぼん**[不精盆･無精盆]洒落本･南遊記
1773　**どうこじき**[―乞食]浄瑠璃･摂州合邦辻	
1773　**どてんじょう**[―天上]洒落本･浪花今八卦	
1776　どつかす[―突]浄瑠璃･桂川連理柵（おはん長右衛門）	
1783　**どてん**[―天]浄瑠璃･伊賀越道中双六	
1785　どえらい[―偉]歌舞伎･傾城忍術池	
1789　どぶとい[―太]浄瑠璃･木下蔭狭間合戦	
1797　どんぐるめ[―包]歌舞伎･関取菖蒲	
1798　どいやみ[―嫌味]洒落本･十界和尚話	
1804　どんまんなか[―真中]洒落本･契情実之巻後編	1802-09　ぶしゃれもの[不洒落者]滑稽本･東海道中膝栗毛
1814　**どめっそ**[―滅相]雑俳･名付親	1802-09　ぶいきもの[不意気物･不意気者]滑稽本･東海道中膝栗毛
1814　どしぶとい[－]歌舞伎･傾城筑紫	1809-13　**ぶきっちょう**[不器用･無器用]滑稽本･浮世風呂
1819　**どぼんぶ**[―凡夫]俳諧･おらが春	1810　**ぶしょく**[無職･不職]歌舞伎･心謎解色糸
1824　どんぞこ[―底]雑俳･手ひきぐさ	1819-27頃　ぶぞろ[不揃]一茶方言雑集
1835-39　どにすい　[－]雑俳･太箸集	

ブチ -	その他
成立年　みだし　［漢字表記］　出典	成立年　みだし　［漢字表記］　出典
1710頃　ぶんまかす[打任]浄瑠璃･傾城吉岡染	1724　どかばり[―張]浄瑠璃･諸葛孔明鼎軍談
1717　ぶったつ[打立]浄瑠璃･鑓の権三重帷子	1748　がらむすめ[―娘]浄瑠璃･仮名手本忠臣蔵
1721　ぶちかえす[打返]浄瑠璃･女殺油地獄	1753　どかわらい[―笑]雑俳･折句式大成
1747　ぶちあける[打明･打開]浄瑠璃･義経千本桜	1758　だだぬけ[―抜]浄瑠璃･蛭小島武勇問答
1763　ぶっかぶる[打被]雑俳･川柳評万句合	1763-69　ずいながし[―流]談義本･根無草
1765　ぶっつぶす[打潰]雑俳･柳多留	1763-69　ずいにげ[―逃]談義本･根無草
1771　ぶちこわす[打壊･打毀]談義本･遊婦多数寄	1767　ずばらむ[図孕]雑俳･川柳評万句合
1773　ぶっすわる[打坐]歌舞伎･御摂勧進帳	1768　ずいがえり[―帰]雑俳･川柳評万句合
1775　ぶっさらう[打掠]雑俳･柳多留	1769-71　ぐいやり[－]談義本･当世穴穿
1777　ぶっちいる[打居]咄本･蝶夫婦	1770　ずいがくれ[―隠]洒落本･辰巳之園
1781　ぶっちめる[打締]雑俳･柳多留	1770　どかぜに[―銭]雑俳･柳多留
1784　ぶんだす[打出]滑稽本･仁勢物語通補抄	1770　ぐいづくり[―作]洒落本･遊子方言
1797　ぶちまく[打―]浄瑠璃･忠義墳盟約大石	1770頃　どすいろ[―色]洒落本･華里通商考（異本）
	1771　ずぶよい[―酔]談義本･虚実馬鹿語
	1772-81頃　ずいおき[―起]洒落本･大通多名於路志
	1772-81頃　ぐいね[―寝]洒落本･大通多名於路志
	1772-81頃　ぐいがり[―借]洒落本･大通多名於路志
	1774　ずいいき[―行]洒落本･婦美車紫
	1774　ずい[－]咄本･稚獅子
	1776-1801　どかぐい[―食]雑俳･末摘花
	1776　ぐいのみ[―飲]黄表紙･高漫斉行脚日記
	1778　ずいはずし[―外]洒落本･広街一寸間遊
	1780　**でもぼうず**[―坊主]洒落本･一騎夜行
	1780　**でもいしゃ**[―医者]滑稽本･風来六部集
	1781　ずいがえし[―帰]洒落本･突当富魂短
	1781　ぐいのぼる[―登]洒落本･新吾左出放題盲牛
	1782　ぐいながし[―流]黄表紙･四天王大通仕立
	1782　ぐいとまり[―泊]黄表紙･四天王大通仕立
	1783　ずいあがり[―上]洒落本･金錦三調伝
	1784　どかおち[―落]雑俳･柳多留
	1784　どかおち[―落]雑俳･柳多留
	1784　どかべり[―減]洒落本･残座訓
	1793　どかあるき[―歩]雑俳･三種尺
	1798　ずいのり[―乗]洒落本･辰巳婦言
1802-09　ぶんなぐる[打殴･打擲]滑稽本･東海道中膝栗毛	1830-44　だだもり[―漏]新板もりづくし見立相撲
1804　ぶっさける[打裂]滑稽本･田舎草紙	1856　どかあし[―足]雑俳･実意金石集
1805　ぶっとめる[打止]滑稽本･叶福助略縁記	1863-80　**でもやくしゃ**[―役者]歌舞伎･綴合新著膝栗毛
1809-13　ぶっつえる[打据]滑稽本･浮世風呂	1869　**でもちゃ**[―茶]歌舞伎･吉様参由縁音信（小堀政談）
1810　ぶっかける[打掛]歌舞伎･心謎解色糸	1870　でもざむらい[―侍]歌舞伎･樟紀流花見幕張（慶安太平記）
1811　ぶちうる[打売]歌舞伎･謎帯一寸徳兵衛	1872　どすあかい[―赤]和英語林集成（再版）

ド -	ブ -
成立年　みだし　［漢字表記］　出典	成立年　みだし　［漢字表記］　出典
1835-39　どうまんなか[―真中]雑俳･太箸集 19C 中　どんけつ[―穴･―尻]咄本･諺臍の宿替 1854-60　どぶす[―伏･―臥]雑俳･狂俳浦浪集 1869頃　どうぶり[―降]真景累ケ淵 1872　どんづまり[―詰]和英語林集成（再版）	1825　**ぶしょく**もの[無職者･不職者]歌舞伎･御国入曾我中村 1826　ぶいき[不意気･不粋･無意気]人情本･花街寿々女 1828　ぶざま[無様･不様]長唄･后の月酒宴島台 1841-42頃　**ぶどうにん**[不道人]人情本･春色梅美婦禰 1841　**ぶきりょう**もの[不器量者]人情本･花筐 1857-63　**ぶやくそく**[不約束]滑稽本･七偏人 1895　ぶしつけがましい[不躾―]不言不語
1902　どぎも[度肝･度胆]社会百面相 1915　どづよい[―強]あらくれ 1920　どぬすと[―盗人]石川五右衛門の生立 1925　どいやらしい[―嫌･―厭]女工哀史 1926　どすけべい[―助平]海に生くる人々 1928　どんづまる[―詰]ガトフ･フセグダア 1928　どまんなか[―真中]春泥 1931　**どちくしょう**[―畜生]綿 1936　どしろうと[―素人]古川ロッパ日記 1955　どんぴしゃ[－]銀座二十四帖 1966　どんぴしゃり[－]薪能 1972　どあほう[―阿呆]鶸 1975-76　どでかい[－]夢を植える 1975　どけち　[－]	1900-01　**ぶきっちょう**[不吉兆]思出の記 1906　**ぶひいき**[不贔屓]破戒 1913-15　**ぶきっちょ**[不器用･無器用]銀の匙 1917　**ぶしょう**ったらしい[不精―･無精―]末枯 1919　ぶまさ[不間―]或る女 1922-23　**ぶしょう**ったらしさ[不精―･無精―]多情仏心 1924-25　**ぶしょう**ひげ[不精髭･無精髭]竹沢先生と云ふ人 1926　**ぶしょう**たらしい[不精―･無精―]痴情 1963　**ぶきみ**がる[不気味―]美しい村

ブチ -	その他
成立年　みだし　［漢字表記］　出典	成立年　みだし　［漢字表記］　出典
1812頃　ぶんまく［打撒］洒落本･筬の千言 1813　ぶっちらす［打散］歌舞伎･お染久松色読販 1817　ぶっくらわす［打食］歌舞伎･桜姫東文章 1823-44　ぶっつわる［打坐］滑稽本･和合人 1823　ぶっとおす［打通］歌舞伎･雑石尊驢 1825　ぶんまわす［―回･―廻］雑俳･柳多留 1825　ぶんながし［打流］歌舞伎･盟三五大切 1839-41　ぶっこぼす［打零］人情本･閑情末摘花 1870-76　ぶっさわぐ［打騒］西洋道中膝栗毛 1870-76　ぶっころがす［打転］西洋道中膝栗毛 1885-86　ぶちこわれる［打壊･打毀］当世書生気質 1885　ぶっぽうる［打放］塩原多助一代記 1885　ぶっかける［打欠］塩原多助一代記 1885　ぶんねぎる［打値切］塩原多助一代記 1885　ぶっつむ［打積］塩原多助一代記 1885　ぶっころがる［打転］塩原多助一代記 1893　ぶっちらかす［打散］落語･化物娘 1897　ぶっつかまえる［打掴］落語･自称情夫 1898　ぶっぱじく［打弾］夜の雪 1899　ぶちしめる［打締］福翁自伝 1902　ぶっぱじまる［打始］重右衛門の最後	1880　**でもあんま**［―按摩］歌舞伎･霜夜鐘十字辻筮 1887-89　ぐいぎめ［―極］浮雲 1891　どすぐろい［―黒］油地獄 1895　がらっぱち　［－］門三味線
1904-06　ぶちおこす［打起］良人の自白 1907　ぶっくべる［―焼］少年行 1909　ぶんのめる［打―］赤痢 1910　ぶっちがう［打違］土 1919-27　ぶっつぶれる［打潰］今年竹 1919　ぶちなげる［打投］或る女 1926　ぶっかい［打交］明治大正見聞史 1928　ぶんながす［打流］軍隊病 1929-30　ぶっこわれる［打壊･打毀］浅草紅団 1929　ぶったく［打焚］蟹工船 1930　ぶっつづける［打続］ある日本宿 1933　ぶったまげる［打魂消］読書放浪 1939-40　ぶちまかす［打負］他所の恋 1940　ぶちまわす［打回］オリンポスの果実 1953　ぶちやぶる［打破］鷹 1954　ぶちまくる［打捲］日本拝見 1968　ぶっさばく［打捌］不意の声 1970　ぶっとばす［打飛］見知らぬ家路 1972　ぶんまわる［―回･―廻］いつか汽笛を鳴らして	1904-06　ずぐろい［図黒］良人の自白 1907　ぐいあおり［―煽］婦系図 1907　だだぐろい［―黒］山彦 1908　どすたち［―質］男五人 1911　どすあおい［―青］断橋 1911　どすあか［―赤］断橋 1915-30　ずはずれる［図外］茶話 1930　ずぶぬれる［―濡］恋とアフリカ 1955　**どかひん**［―貧］記念碑

ズ - 〔接頭〕（「図」「頭」と表記されることが多いがあて字）とびぬけている、度外れているの意を添える。「図横柄」「図抜ける」「図外れ」など。

ズイ - 一〔接頭〕名詞や動詞の上に付いて、すぐに、ずいと、ためらわないでなどの意を添える。「ずいあがり」「ずい隠れ」「ずい乗り」「ずい逃げ」など。明和・安永（一七六四～八一）の頃に流行。二〔名〕「ずいにげ（逃）」の略。

ズブ - （「づぶ」とも表記した）一〔副〕1（多く「と」を伴って用いる）頭から全身水にぬれるさま、物の全体を水につけ込むさまなどを表わす語。また、水やぬかるみに足をつっこんだ時の音や、その状態を表わす語。2（多く「と」を伴って用いる）柔らかいものを、さし貫くさまを表わす語。3（多く「と」を伴って用いる）きっぱりと断ちきるさま、はっきりとして、力強く確かなさまを表わす語。断然。はっきり。4まったく。まるっきり。すっかり。現代では、「ずぶの」の形で用いることが多い。二〔接頭〕したたかに、はなはだしくの意を添える。「ずぶぬれ」など。三〔名〕1「ずぶろく」の略。2場所を移りながら、物乞いをして歩く者。

ダダ -〔接頭〕名詞・動詞・形容詞などの語の上に付けて用いる。めちゃくちゃであること、めったやたらに一途であること、程度の並はずれてはなはだしいことの意を添える。「だだがらい」「だだくろい」などと用いる。

デモ - 四〔接頭〕（「あれでも」の意からという）職業や身分などを表わす語に付いて、未熟なもの、信頼できないもの無価値なものの意を表わす。「でも医者」「でも客」「でも坊主」など。

ドカ - 一〔副〕（多く「と」を伴って用いる）二〔接頭〕名詞や動詞の連用形から変化した名詞の上に付いて、その量が多いとか、動作が急激に、かつ、大量に行なわれる意を表わす。「どか雪」「どか減り」「どか飲み」など。

ドス 〔接頭〕多く、色を表わす形容詞の上に付いて、濁ったような状態であることを表わす。「どす黒い」など。

以上『日国　第二版』の記述を見るに、「ド」「ズ」「グイ」「ズイ」「ドカ」は指悪的意味を伴わないでその語の意味を強調する用法をもち、「ド」「ブ」「デモ」は指悪的意味を添える用法をもち、「ブチ」「ガラ」「ズブ」「ダダ」「ドス」は単なる強調ではなくやや指悪的に傾いた意味を添える用法をもつと大略まとめられよう。

4. 語頭濁音接頭語の性質

前田勇（1968）は近世上方語の接頭語の性質について「近世の上方語彙に接して強い印象を受ける事象の一つに、接辞（affix）の特異性ということがある。その特異性は、少なくとも次の三点において際やかである。一つは語彙の豊饒ということ、二つはその豊饒が前代（ここに前代とは近世以前をさす）からの堆積ではなくて当代に入ってからの多産がもたらしたものであるということ、三つは語彙の一つ一つがきわめて旺盛な生産力を有するということ、これである。しかし本稿にはその全容を尽くす余裕がないので、接辞の中、接頭辞（prefix）のみを取り上げる。しかし対象を接頭辞のみに限るとなれば、上記の三点にはなお一点を追加しなければならなくなる。それは近世上方語における接頭辞には、軽蔑・嫌悪・憎悪の情を表すためのものが圧倒的に多いということである。この一点のみをもってしても、これを接頭辞に限って一個の小主題とする理由は十分であると考える」と記している。前田氏は前代から存在するものとして「えせ」「なま」「す」「うそ（薄）」「ど」（「どん」「どう」）「づ」「け」「ひち」「けち」「とち」「へち」「しみ（染）」「いき（生）」「しに（死）」「いけ（生）」「やけ（焼）」「かす（糟）」「かず（数）」「ほろ」「あか」「さら」「かせ」「あた（あった）」「えら」について個別に検討を加えている。

道行朋臣（1997）は中世末（室町時代）の用例について検証したうえで「接頭語「ど－」の本来的な意味は、〈卑罵〉ではなく〈強調〉であったと考えられる。〈卑罵〉という意味が認められるようになったのは、採集した用例から判断して江戸時代以降（一八世紀中頃）と思われる」と結論付けている。「〈卑罵〉という意味が認められるようになった要因」は、(1) マイナスの評価をもつ多くの語と繰り返し結びつくことによる、〈マイナス評価のやきつけられ現象〉(2) 濁音形の接頭辞「ど－」を伴うことによる、〈語頭の濁音に対する減価意識〉が考えられ，この二つが相乗的効果的に作用した」とする。また、「ド -」が「マイナス評価の意味を本来持っていなかった」理由を漢語出自であり、「のちに和語化する過程において、本来和語におけるものである〈語頭の濁音に対する減価意識〉が生じ、〈卑罵〉の意味が認められるようになったという可能性が考えられる」と推定している。

丹保健一・倪永明（2000）は「「無（ブ）～」「不（ブ）～」交替が可能な語の語彙的特徴について、また、それに関して、「不」が「ブ」と読まれるようになった要因」について『大辞林 初版』『漢語大詞典』を調査し、結論を次の 5 項目にまとめている。ここではその大意を記す。

(1)「無（ブ）～」「不（ブ）～」の交替を許す語（20 語）は「ぶどう（無道・不道）一語を除いて総て混交漢語また和製漢語であり、純粋漢語は見られない。

(2)「不（ブ）～」の語形を持つ語（15 語）総て混交漢語また和製漢語であり、純粋漢語は見られない。

(3)「無（ム）～」は結合相手が「無い」意味を表すが、「無（ブ）」にはマイナスの意味・

〈表 2〉　語頭濁音接頭語の世紀別初出例数

語＼世紀	12	13	14	15	16	17	18	19	20	合計	備考
ドウ	0	0	0	0	2	1	8	2	0	13	
ドン	0	0	0	0	0	0	5	4	3	12	
ド	0	0	0	0	3	2	15	5	11	36	
合計	0	0	0	0	5	3	28	11	14	61	「ドッ-」なし
ブ（漢語）	3	7	3	6	15	23	13	6	8	84	不・無を区別せず
ブ（和語）	0	0	0	1	4	4	7	6	1	23	不・無を区別せず
合計	3	7	3	7	19	27	20	12	9	107	
ブチ	0	0	0	0	0	6	7	3	6	22	
ブッ	0	0	0	0	0	5	7	19	10	41	
ブン	0	0	0	0	0	3	3	5	3	14	
合計	0	0	0	0	0	14	17	27	19	77	
ガラ	0	0	0	0	0	0	1	1	0	2	
グイ	0	0	0	0	0	0	9	1	1	11	
ズ	0	0	0	1	0	1	2	0	2	6	
ズイ	0	0	0	0	0	0	11	0	0	11	
ズブ	0	0	0	0	0	1	1	0	1	3	
ダダ	0	0	0	0	0	1	1	1	1	4	
デモ	0	0	0	0	0	0	2	4	0	6	
ドカ	0	0	0	1	0	0	9	1	1	12	
ドス	0	0	0	0	0	0	1	2	3	6	
合計	3	7	3	9	24	47	102	60	51	306	

イメージが加わる語がある。

(4)「不」が「ブ」と読まれるようになったのは「無」が「ブ」と読まれることからの類推で、新しい語形（中国にはない語形）でマイナスイメージを持つ場合に限り「ブ」と読んだのだろう。

(5) その結果、マイナスイメージが強い語に「不（ブ）～」「無（ブ）～」の両者が使われるようになった。

「ブ -」に関しては「フ -」との関係において、指悪的意味をもちながらなお濁音形を採らない語が多くあること、漢字表記などでなお不詳とせざるをえない点があるが、語頭濁音語「ブ -」の成立過程については丹保健一・倪永明（2000）の結論に従うべきだろう。

〈表 2〉は〈表 1〉に取り上げた語頭濁音接頭語のそれぞれについて、12～20 世紀の各世紀にそれぞれ何語の新語を生みだしたのかを示したものである。「ド -」については語形を「ドウ -」「ドン -」と区別して示し、「ブ -」については後接する語が漢語である場合と和語である場合を区別して示した。語頭濁音（接頭）語は多分に口頭語的であるために用例が見いだせず、その結果として『日国　第二版』に見出し語として採録されていない語もあるいは多く存するであろうが、〈表 2〉から語頭濁音接頭語の趨勢の概略を知ることは可能であると考える。

前田勇（1968）の指摘のとおり語頭濁音接頭語は近世に盛んに新語を派生させた。「ズ -」～「デモ -」までの 9 語は新たな派生語産出のピークが 18 世紀であり、「ド -」「ブ -」「ブチ -」が現代に至るまで盛んな造語力を示しているのとは事情が異なるようである。しかしたとえば「ダダ -」について見ると、『日国　第二版』の見出しには採用されなくとも確かな造語力を維持しているものもある。島田泰子（2008）は『日国　第二版』に立項されていない現代語として「ダダガライ（辛）」「ダダクダリ（下）」「ダダナガシ（流）」「ダダモレ（漏）」をあげ、また近世の例として「ダダハシリ（走）」をあげている。島田氏は「ダダ -」の成立過程を「副詞タダ（只・唯）が、語頭を濁音化させてオノマトペ的な性格を帯びたもの」と推定し、さらに「語頭の濁音化によって、ダダには、タダに比べてオノマトペ的な性格が加わったと見ることが出来よう。先に示した近世期の用例が、〔24〕〔25〕「走る」、〔26〕「（音が）抜ける」、〔28〕「（水が）漏れる」などといった動作や現象の激しさや程度に関わる表現として用いられている（つまりいかにもオノマトペが担うような働きを備える）ことからすれば、逆に、オノマトペ的に解釈されうることが、語頭の濁音化という事態を許容した、とも考えられるかもしれない」として語頭濁音化した理由を語頭濁音のオノマトペへの類推作用に求めている。

「ド -」については 20 世紀に入ってなおその造語力は盛んであることを見て取ることができるが、現代においてはどのような語に接続しているのであろうか。以下に、現代語に見られる語頭濁音接頭語「ド」を冠した語を五十音順に配列してあげる。その際『日国　第二版』に立項されている語は除いた。リスト作成に当たっては文京院大学外国語学部「日本語表現法応用」および二松学舎大学文学部「日本語学特殊講義②」受講生（いずれも 2010 年度開講科目）より情報の提供を受けた。

(1) ドアクトウ（悪党）
(2) ドアクマ（悪魔）
(3) ドアツカマシイ（厚）
(4) ドアップ
(5) ドアホ
(6) ドイケメン
(7) ドイソガシイ（忙）
(8) ドイナカ（田舎）
(9) ドインケン（陰険）
(10) ドインラン（淫乱）
(11) ドエス（S）
(12) ドエッチ（H）
(13) ドエム（M）
(14) ドエロ〔＝エロイ〕
(15) ドエロイ
(16) ドオタク
(17) ドカス（滓）
(18) ドカワイイ
(19) ドギタナイ（汚）
(20) ドギモ〔＝キモイ〕
(21) ドキンガン（近眼）
(22) ドキンチョウ（緊張）
(23) ドグサレ（腐れ）
(24) ドクズ（屑）
(25) ドケーハク（軽薄）
(26) ドケーワイ（KY）
(27) ドゲドウ（外道）
(28) ドコウカク（広角）
(29) ドサンピン（三品）
(30) ドサンリュウ（三流）
(31) ドストライク
(32) ドスッピン（素ッピン）
(33) ドストレート
(34) ドセンター
(35) ドタイプ
(36) ドタンキ（短気）
(37) ドチキン（ハート）
(38) ドチコク（遅刻）
(39) ドチャライ
(40) ドチンピラ
(41) ドッチラケ（白け）
(42) ドッピキ（＝ドンビキ）
(43) ドッピーカン〔快晴〕
(44) ドテイバン（定番）
(45) ドテイノウ（低能・低脳）
(46) ドデカ（＝ドデカイ）
(47) ドテンネン（天然）
(48) ドナマイキ
(49) ドバカ
(50) ドハクリョク（迫力）
(51) ドハデ
(52) ドハンサム
(53) ドビジン（美人）
(54) ドヒトリ（独）
(55) ドヒマ（暇）
(56) ドピンク
(57) ドピンチ
(58) ドビンボウ（貧乏）
(59) ドンミン（貧民）
(60) ドヘンタイ（変態）
(61) ドブス
(62) ドブトイ（太い）
(63) ドヘタ（下手）
(64) ドマイナー
(65) ドマジメ（真面目）
(66) ドマヌケ
(67) ドヤン（＝ドヤンキー）
(68) ドヤンキー
(69) ドワル（悪）
(70) ドンビキ（引き）

「ドイケメン」「ドストライク」「ドセンター」「ドタイプ」「ドビジン」「ドハンサム」等は指悪的ではないが文体は俗に傾く。「ドアップ」「ドピンク」は好ましくないと感じられるために「ド」が冠せられたのだろう。その他の語は何らかの意味で指悪的であるといいうる。現代語における「ド -」の下接語はその意味範囲に広狭があることが条件で、「ド -」を関することで意味範囲が限定され「真の～」の意味となる。「ドピンク」が成り立つのは一般にピンク色に淡いものから濃いものまで幅があると意識されているからであろうか。

語頭濁音語は現代語においてもなお、(1) 少数派である、(2) 清音形と一種の二重語をなす、(3) 意味領域に偏りがある（a) 清音形に対する強調形であったり、b) 指悪的意味を加えたりしている）というような特徴がある。

語頭濁音語が接頭語化した「ガラ -」「グイ -」「ズイ -」「ズブ -」「ダダ -」「デモ -」「ドカ -」「ドス -」「ブチ -」および漢語起源と推定される「ズ -」「ド -」では、接頭語の付属しない語との関係を一種の二重語形であると見なせば、上記（1）～（3）の特徴は語頭濁音語と共通しているといえる。一方、漢語出自の接頭語が和語にも接続するようになったもののうち、「ブ -」については事情が異なっている。「ブ -」は否定の接頭語「フ -（不)」「ム -（無)」を冠した語の一部が「ブ」と読まれるようになり、まず形の上で語頭濁音接頭語となった。そして次の段階として、語頭濁音であることにより他の語頭濁音語との間で類推作用が働き、強調や指悪的意味を表すようになったと考えられる。漢語出自と推定されている「ド -」もすでに近世以前から和語に接続して強調的意味を担っている。和語の語頭濁音語は平安時代以降その数を増やしているが、語頭濁音接頭語の場合も同様であり、現代語でもなお総体として見れば造語力は旺盛である。漢語出自の「ド -」「ブ -」は現代語においてはその性格の中心を漢語接頭語から語頭濁音接頭語に移しており、特に「ド -」は語種・品詞を撰ばず多様な語に接続して盛んに新たな語頭濁音語を創出するに至っている。

複合・派生によって「強調的意味」・「指悪的意味」を附加するのは語頭濁音語だけに限られた機能というわけではない。しかし語頭濁音語とそれに対応する語頭清音語は、後者が前者から派生した一種の二重語形であり、前者が持つ指示的意味に含蓄的意味を附加するという関係にある。語頭濁音という形態は程度の差こそあれ、常に「指悪的」意味と強く結びついている。よって、新たに語頭濁音語が生み出される場合でも、語頭濁音語にふさわしい意味を持つ語が選択されるのである。

5. おわりに

通常の語頭濁音語は語種を和語に限っており、それはまた語頭の清音を濁音に変えることによって生じた二重語形である。つまり語頭濁音を造語するには大きな制約が存在しているのである。これに対して、語頭濁音接頭語のうち、「ド -」「ブ -」は和語以外にも接続し、強調あるいは指悪的意味を下接語に付与する機能を持つ。語種を和語に限定しないこととともに、

「語頭清音語」以外にも語頭濁音語を派生させることができるという点で通常の語頭濁音語と異なる。このことは造語力の強さにつながり、特に「ド -」は現代語において多くの語頭濁音語を産出するに及んでおり、汎用性を備えた語頭濁音接頭語と位置づけることができよう。

語頭濁音語は平安時代以降その数を増加させて現代に至っている。強調または指悪的意味を含意するという語頭濁音語がもつ類型的意味は歴史的に強化される方向で推移してきたと考えられ、その結果和語に限定されていた語種の制約を超え、漢語出自の接頭語にも類推作用が及ぶに至ったと解釈することができよう。

文献

亀井　孝（1970）「かなはなぜ濁音専用の字体をもたなかったか――をめぐってかたる」『人文科学研究』12　一橋大学　※亀井孝著作集『言語文化くさぐさ―日本語の歴史の　諸断簡―』（吉川弘文館）に再録

島田泰子（2008）「接頭辞ダダの成立と展開」『二松学舎大学創立 130 周年記念論文集』二松学舎

鈴木孝夫（1962）「音韻交代と意義の分化の関係について―所謂清濁音の対立を中心として　―」『言語研究』42　日本言語学会

鈴木　豊（2010）「語頭濁音語「場」の成立過程について」『文京学院大学外国語学部文京　学院短期大学紀要』9　文京学院大学総合研究所

丹保健一・倪永明（2000）「接頭語「不（ブ）」「無（ブ）」の交替を許す語をめぐって」『国　語文字史の研究』五　国語文字史研究会

前田　勇（1968）「近世上方語の接頭辞について」『近代語研究』2　武蔵野書院

道行朋臣（1997）「接頭辞「ど－」の史的考察」『花園大学国文学論究』25　花園大学国文学会

（2010.11.18 受稿，2010.12.22 受理）